

ピアノを 続ける 中高生

「継続」と「両立」 に向けた 指導サポートとは



他国と比べても、ピアノを習う子供の数が圧倒的に多い日本。しかし、中学生・高校生がどんどんピアノを辞めてしまっているのも、我が国のピアノ教育の現実だ。

今号のピティナ・ピアノステップ10周年記念特集は、ステップのキーワード「継続」にちなみ、「ピアノを続ける中高生」に焦点をあてる。忙しい学生生活の合間をぬってレッスンに通い続ける彼らが、ピアノを辞めないその理由とは？ そして、彼らがピアノを続けたいと思えるために指導者側に求められることは。

中高生のステップ参加者800人と、その指導者60人を対象に行なったアンケート調査と、中級指導において素晴らしい実績を持つ指導者インタビュー。この2つから見えてくる、中高生ピアノ学習者の本音、継続学習の実態、そして「両立」の真の意味を、指導者と生徒、両方の立場から検証する。



「怖い先生」から 「ピアノのお母さん」への転身

小学校の頃はなんの苦勞もせず教えていた子が、中学生になると急に伸び悩む…このような悩みを持つピアノ指導者は多い。そんな中、中田元子先生の生徒は、中高生の時期に急激な成長を遂げる。また、グランミューズから音大生まで、生徒のタイプも幅広い。そんな中田先生が目指す、温かく、厳しく、長期的目線で行う中高生指導とは。



中田元子先生

当協会評議員、千里支部長、
大阪城ステーション代表、アド
バイザー派遣委員会副委員長。

目指すものは皆同じだから、 差別も区別もしない

——中田先生は色々なタイプの生徒さんを教えていらっしゃるようですが、中高生指導の際に特に意識されていることはありますか？

「音大を目指して弾いている子も、趣味で続けている子も、基本的に差別と区別はしません。レッスンの仕方、与える曲も全く変わりませんね。曲を掘り下げる度合いに差があっても、目指すものは皆同じ。

生徒が最終的にどんな進路を選んだとしても、初めから適当なレベルを目指すのではなく、まずは日本一を目指しなさい、と言いますね。とりあえずそのための努力はして、無理だったらそこから少しずつ目標を下げていけば良い。うちの生徒の場合は、身近に東京芸大に合格した子や、コンクールの全国大会に行った子がいると、更に励みになるようです。」

——先生の生徒さんは、すごく仲が良いそうですね！

「弾いている曲についてメールで報告しあったり、上手く行かずに凹んでいる子がいると、励ましあったりしているみたいです。

もちろん、内心では競争もある。ですので、私は常に絶対評価でしか生徒を叱らないようにしています。『この間違い、何回目？』と指摘しても、『〇〇ちゃんは出来て、どうしてあなたは出来ないの』とは絶対に言わない。こういった叱り方が子供にとって一番傷つくし、続ける意欲をそいでしまいます。

私は自分の娘を教えていた時は、その年齢に近い生徒は取らないようにしていました。どうしても自分の子と比べることになってしまうし、生徒さんのご両親も、うちの娘と自分の子供を比べてしまうことになる。他の子と同じように先生に愛されていると感じられた時に初めて、生徒は先生との信頼関係が築けるのだと思います。」



▲<レッスン拝見1>私立の進学校に通いながら、熱があってもピアノのレッスンにだけは通いつづけているという片山拓哉君(中2)に、中田先生は音楽専門学生の子と何ら区別のない指導をしているという。「ここはどういうイメージ?」「この部分のお料理の仕方、もっと工夫して!」など、レッスンはいつも真剣勝負。

子育てが1番の勉強になりました

——— 中高生指導に対して、昔と比べて意識は変わりましたか？

「独身時代も教えていましたが、今思うとその頃は独裁者で、すごく怖い先生だったと思いますよ。

でも、年子の娘と息子を二人育て、教えたことで子育ての大変さが分かりました。反抗期の時期は、レッスン中に本が飛び交ったり、椅子から突き落としたり、すごかった(笑)。その後に、よそのお子さんに『これなんで出来ないの!』なんて、以前のように偉そうに言えませんが。代わりに、それが出来るようになる方法を、生徒の目線に降りて考えるようになりました。また、反発されても怒り返さずに、順序だてて理屈を説明すると、みんなわかってくれる。このように長く指導していると、生徒もだんだんと先生のことを『ピアノのお母さん』ぐらいに思ってくれるようになります。本当に、娘のお陰ですごく勉強させてもらいました。」

「お医者さん」のように生徒と向き合う

——— 中田先生の生徒さんは、中高生になると急な成長を遂げるという点で非常に特徴的ですよね。

「私は初期の頃は、楽譜のひとつひとつの記号の意味から、逐一丁寧に教えるようにしています。3の指からはじめ、2、4、5、1と指づくりをして、安定した手作りをしてから重心の移動へと入っていったり、またリズム叩きで色々なリズムの種類を感覚的に覚えさせて、それをリズムカードを用いて頭でも理解させながら拍子感をも感じさせるようにしています。曲も、アナリーゼをしながら進めていきます。ある程度の所までは、しっかり、繰り返し繰り返し教えこみ、そこから先は応用で、生徒に応じた教材を取り入れるというスタイルです。

また、それまで基礎がきちんと出来ていないまま途中から習いに来る子も、リハビリのような感じで徹底的に指のトレーニングをさせますね。何ヶ月も指の練習のみをやっていて、『お宅は毎日、調律師さんが来ているの』とお隣の人に聞かれた子もいるぐらい(笑)。後々大きな曲を弾く時に必ず出てくる、テクニクと読譜の壁を取り払う為に、こういった基礎の訓練は、音楽の道に進む子も趣味で弾いている子区別せずに与えています。その反面、必要な訓練はその生徒によって限られてきますので、場合と状況に応じてその種類と量は調整します。」



▲<レッスン拝見2> 2006年ピティナ・ピアノコンペティションでJr.G級金賞を受賞した生熊茜さん(中2)は、翌々日のコンサートに向けて曲を仕上げている最中。「この間浜松のコンクール聞いてきて思ったけど、みんなやっぱり演奏で話をしないと、考えが出てないなあかん。自分はこういう風に感じて、こういうところをみんなに伝えたいってところをアピールしてみよう」音楽表現への追求は続く。

——— 2006年度ピティナ・ピアノコンペティション Jr.G級金賞の生熊茜さんも、先生につかれてからみるみる上達されたそうですね。

「すごく楽々と賞を取ったみたいに見えますが、実は違います。もう一歩何かが足りなくてコンクールに通らない、という状態で私のところにきたのが、2年前ですね。

彼女は、安定した手や読譜はかなり出来ていたのですが、音楽に対する感性がとても乏しかった。『この曲、どんな感じ?』『ピクニックで面白かった』『どういう風に面白かった?』『う〜ん。楽しかった』『どういう風に楽しかったの?』『う〜ん』…と言った感じで、音楽に対する想像力の豊かさが全然足りなかったんです。ですから、課題曲のモーツァルトを弾く為に、オペラと一緒に聴いたり、シンフォニーを聴きながらオーケストラの編成と音の響きを解説したり、曲に対するイメージをレポート用紙に書いてこさせたり、『こういう感じ』と私が踊ってみせたりもしました(笑)。

ピアノ指導者は、ある意味お医者さんのような役割を持っていると思います。お医者さんが色々な患者さんを診るうちにベストな治療法を編み出していくように、私たちも色々な生徒と巡り合った結果、ノウハウのようなものを見出して行く。そして、同じ薬でも人によっては合わないことがあるように、その人にとってベストな方法というのも生徒によって変わってくることがわかってくるのです。ですから、とにかく諦めずに、その子に応じたカリキュラムを組んで、目標を達成するための方法を計算して取り組むことが大切だと思います。」

厳しいけれど、縛らない。 自主性を育てるレッスンとは

小学生の頃は言われたことをそのまま受け止めるだけでよくても、中学、高校と成長するにつれ、親や先生からの自立が必要になってくる。そんな時期に、生徒同士での室内楽演奏を取り入れているという庄司美知子先生が実践する、自立心育成型教育とは。



庄司美知子先生
当協会正会員。仙台中央支部
支部長、ステーション育成委員。

選曲は自主性を重視

—— 桐朋高校、大学、そして指導者に・・・と順調に音楽の道を歩む中で、ピアノを続けていくことを難しく思った時期はありますか？

「中学まではピアノは趣味で弾いていたので、音楽高校に入学した時はエチュードやバッハなどの基礎の曲をほとんど知らず、周りとの差を埋めるためにものすごく苦労しました。友人が東京の一般大学を受けたりする中、私自身も何か違う道があるのでは・・・と、ずっと悩んでいましたね。だから、生徒がピアノを嫌になった時など、気持ちはすごく良くわかります。ですので、『来週まで必ずこれだけやって来なさい』という曲の与え方はなるべくしないように気をつけているつもりです。何曲かの中で今の自分にあった曲をさがさ

せた後、組み合わせ方も生徒にゆだねるように心がけています。」

—— 生徒さんが曲を選んだりも？

「中学生ぐらいになって、いかにも面白くないという顔で弾いたりする子、いますよね。でも『やりたい曲ない?』って聞くと、不思議と良い顔をしたりする。与えられたものは嫌でも、自分が選んだものは一生懸命出るんです。」

それで、いざ弾きたい曲が言えない時は、自分で弾きたい曲を調べてから選んで来るように言ったりもします。『この曲は誰のCDを聴いたら良いでしょうか?』と聞かれても、私はほとんど何も言いません(笑)。中学生以降は好みもはっきりしてくるので、いくつかのCDを聴いて、



▲<レッスン拝見1>

「今日はミスが多いね。今試験中?」とすぐに気付く庄司先生。「はい」と答える生徒さんに、「今試験があって動揺してるでしょ?そういう時には全部はさらわなくていい。もう少し要領よく、出来ないところだけさらってみよう」と優しくアドバイス。

自分が気に入ったものを持ってきなさい、と。自分が昔苦労した分、生徒には出来るだけ沢山の曲に触れさせるようにはしてはいますが、課題が多くても、出来るだけ生徒の自主性を大事にしたいと思っています。」

室内楽で、 子供達の新しい社会が・・・

—— 桐朋仙台音楽教室では、中高生同士での室内楽演奏が盛んだそうですね。

「ヴァイオリンの先生方と相談して、小学5年生以上の子供達の室内楽クラスを立ち上げました。子供達同士で弾くのは、大変ですが、色々利点があります。レッスンの前に、必ず1回は音合わせをするという決まりがあるので、お互いのスケジュールの調整から始まる。そこでまず、自分の我を通さずにスケジュールを合わせることを覚えます。更にそのために、自分達で練習室を予約しなければいけない。そして練習中は、自分達の間で何が悪い、良いかをちゃんと話し合います。大抵初めは、お互いの演奏も聞かず、めちゃくちゃですよ。

それでも、段々と回を重ねるごとに、演奏のマナーはもちろん、生活のマナーも覚えていくのです。例えば、練習の前に楽器や譜面台の準備をして、後できちんと片付けること、また、楽譜は譜めくりをしやすいように製本して自分で作ることなど。お互いの言ったことを鉛筆で楽譜に書き込むという当たり前のことも、ピアノの人は習慣がないし、レッスンの後にピアノを開けっ放しで帰っても、誰も何も言わない。ヴァイオリンの人が弾き終わったあと自分の楽器を丁寧にみがいている姿を見て、自分も使った楽器をきれいにするなど、徐々に学んでいくのです。この間もトリオをやっている生徒が、『遅刻した人は1分100円の罰金』というルールを作っていました。17時に練習開始の場合、17時には音出しが出来ることが条件だそうです(笑)。子供たちの中に新しい社会ができていくのでしょう。

こうしたマナーを覚えることで、後々仕事をする時に通用する人間になれるのだと思います。私を含め音楽



▲<レッスン拝見2>「この曲、モーツァルトがいくつかの時書かれたかわかる?計算してみて」「このテンポ設定は何をを考えて弾いている?」「その指使い、苦手みたいね。どれなら弾きやすい?」レッスン中もぼんぼんと質問が飛び、その度に真剣に考えて答える生徒さんと一緒に徐々に曲を作り上げていく。

の道を歩んできた人は、何もかも周りにしてきてもらった人が多くて、下手したらレッスン後に親がかばんを持って帰ってくれたりする。それだけにこういった教育は大切ですし、これからのピアノの先生は、音楽も、それ以外のことも教えていかなければいけないと思います。」

自分から出て行かないと、 チャンスはない

—— ピアノ以外に目を向けることは、音楽性を養う意味でも大切です。

「極端な話、この間生徒に『ここの部分は、海の砂浜で裸足で歩いている感じ』と言ったらばかーんとしていたので、『海、行くでしょ?』と聞いたら『行きません』。『裸足で歩かないの?』と聞くと、『汚いから』と…それはまずいと思いました。私自身、中学3年生までにクラブも生徒会活動も、修学旅行も文化祭も、やりたいことにはすべて参加した経験が、今に生きていると思います。学校での沢山の経験、本を読んだり映画を見たり、すべてが音楽をする上での力となると信じます。

何事も、自分から色々出て行かないとチャンスはありません。例えばコンクールに参加するにしても、賞を取ることより、そのために努力して、色々な人と出会うことの方が財産になる。そういった色々な経験を積んで行って欲しいと思っています。」

「受信状態」の子供から 言葉と感性を引き出すには

中高生指導において最も多い悩みのひとつが、コミュニケーション。世代の違いによるジェネレーションギャップ、生徒の反抗期に伴い沸き起こる周りへの反発心、生徒と先生のコミュニケーション力不足…原因は色々挙げられるが、対策となると難しい。そこで、コンクールやステップでの温かく、的確な講評、そして全国各地にて積極的に行なっている演奏講座やレクチャーコンサートなどが非常に評判の高い小佐野圭先生に、コミュニケーションの極意についてお伺いしてみた。



小佐野圭先生
当協会評議員。国立音大講師、
玉川大学芸術学部助教授。

まずは、会話を成立させるところから

—— 中高生の生徒とコミュニケーションを取る上で、最も気をつけていることはなんですか？

「今は、質問したことに対して『こうです』と言えない子供が多い。つい最近も、『名前は？』『今何の曲やってるの？』といった質問にさえきちんと答えられない高校生の子がいて、びっくりしました！携帯メールやミクシィなどの普及で、人の目を見てのコミュニケーションや会話が簡単に成立しない時代になってきたのだと思います。

だから、僕はレッスンではとにかくしゃべりまくります。まず、『どう？』と声をかける。『え？何がですか？』と相手が反応したら、『どう？』っていうのは、『元気ですか？』『ピアノ上手く行ってますか？』『学校は楽しいですか？』という意味の挨拶なんだよ、

と説明してから話を進めるんです。質問に対して返事をしなさい、この基本から始める。」

サイレンスも会話の一部

—— それでもなかなか返事をしてくれないシャイな子は、多そうですね。

「受けるばかりで、自分が出力するところまで行かない、『受信状態』の子は多いです。だけど、質問して相手が黙っていたからといって、『こちらの質問に答えられないとは何事だ！』と怒るのが正しいわけでもない。『そういうときは“はい”って言うの』とつつこんであげれば良いのです。聞くことも、喋ることと同じぐらい大事なコミュニケーションだと思いますし、会話の中でのサイレンスは大事な役割を果たしています。相手がこちらの質問に対して無言であったとしても、心の中では必ず何か感じたり、考えたりしているから。

僕はいつも大学生の生徒に夏に合宿をさせて、将来指導者になった時に備えて模擬レッスンをさせるんです。すると、僕がレッスンでしゃべりかけた時はろくすっぽ返事もしなかったような子が、先生と言う立場に立ったときには、ちゃんと自ら生徒に語りかけているんですよ。その瞬間、すごく安心しました。そのときは返事をしていなくても、僕が色々と言っていたことを、実はちゃんと聞いていたんだな、と。言われた



ことは一生懸命聞いているんだけど、出力の仕方がわからない子は沢山いて、そういう子は、10年後、あるいは立場が変わった時には、何かを発信出来るかもしれない。そう気付きました。」

言葉にすることで、音楽の本質に触れる

——音楽についての考えを上手く引き出すためには、何か具体的な工夫はされていますか？

「僕が昔ついていた先生が、『ショパンのバラードを、『そこはかとなく弾きなさい』と言ったことがあります。帰ってから辞書

で引いてみてやっと意味がわかって、『ショパンは“綺麗に”とか“美しく”とかいうけど、“そこはかとなく”弾くんのだ!』と思ったのを未だに鮮明に覚えているんです。エチュード(Op.25-2)は『霞のように弾きなさい』とも言われて、これも非常に印象的だった。音楽ってなんとなくこんな感じというイメージはあるけど、それを言葉にすることで大事なんだ、ということ、その先生に教えられましたね。

そんな経験から、自分の生徒にも、まずは言葉で音楽作品を認識させます。曲を弾かせて、とりあえず『どんな感じ?』聞いて見る。ただ『綺麗』とか『楽しい』ではなく、例えばクライバーがベートーヴェンシンフォニー



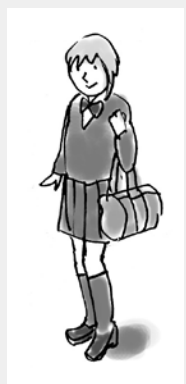
▲昨年12月、甲府湯田高校での公開レッスンにて。故郷の山梨県の文化向上のため、教育活動も積極的に行なっている

について、『10代の女の子が脇をくすぐられたような感じで弾け』と言った時のように具体的に説明してみて、と言うんですが…なかなかね(笑)。そこで、今度は感じたことを書かせてみます。どこかの曲目解説をそのまま写すような形ではなく、自分自身がこの曲を弾いてどう感じたか…何がよかったか、何が難しかったか、そういったことを文章化させます。たとえ『綺麗』でも『楽しい』でも、ピアノをただ弾くだけじゃなく、自分が音楽に対して感じたり考えたりしていることをどう表せば良いかを真剣に考えて、イメージネーションを働かせる。これが、音楽の本質に触れるために一番大事なことだと思えますね。」

生徒とのコミュニケーション、取っていますか？

今特集で行なった指導者アンケート(詳しくは20ページ参照)にて、レッスン中に生徒と話すピアノ以外の話題について尋ねたところ、「学校について」が一番多く、続いて生徒の「友達」「家族」「恋愛」について、先生自身の人生経験談などが挙げられた。「生徒やお母さんが内緒でこっそり相談に来るので、駆け込み寺と言っています」(山田つづみ先生)といった微笑ましいエピソードも。また、「人生について」から、「洋服やお菓子作り、ダイエットについて」まで、レッスンの合間に繰り広げられる会話が多岐に渡っているのは、1対1の密な時間を過ごしながら、親子でもない、その程よい距離感が生み出しているのかもしれない。その反面、男性指導者は思春期の女の子がなかなか話をしてくれない、といった悩みも抱えているようだ。(娘の反抗期に戸惑う父親のよう?)

こういった雑談から、生徒の性格、体調、学校や家庭の様子などを上手に聞き出し、指導と生徒との関わり方に反映させているという意見が多かったことに、指導者・生徒間での音楽以外のコミュニケーションの大切さがうかがえる。



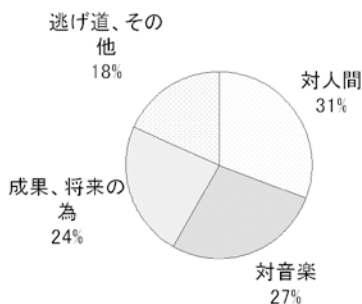
アンケート検証：「継続」と「両立」の実態&対策

どうしてピアノを続けるの？

中高生が感じる 継続へのモチベーション

学校、塾、部活、友達付き合い…と、とにかく忙しい昨今の中高生たち。そんな環境の中、ピアノを習い続ける彼らの継続への原動力の源とは。中学生・高校生のピティナ・ピアノステップ参加者約700人を対象に行なったアンケート調査（うち有効回答数241件）*から、中高生のピアノ継続の詳しい実情が浮かび上がってきた。※このアンケート調査は、過去2年間でピティナのステージに10回以上参加された中学1年生～高校3年生の方を対象に実施した。

どうしてピアノを続けるの？その原動力とは



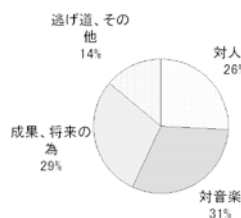
ピアノで築く人間関係

まず、継続の理由として一番多かったものは「対人間関係」。周囲のサポートや称賛、そこから生まれる人との繋がりが、ピアノ継続においていかに大切かを物語っている。俗にいう思春期を迎え、人間関係も複雑になってくる中で、「家族や周りの人が応援してくれることが何よりも原動力」（中3・栃木）といった意見は多数寄せられた。「卒業文集で『一番有名になりそうな人』No.1になれた」（中2・愛知）「全校生徒が自分のことを知っている」（中2・長野）という人も。日中の大半を過ごす学校でもピアノ経験者の活躍の場は多く、継続への大きな原動力となっている。

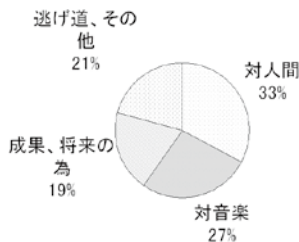
更に、進路別集計を見てみると（右上グラフ参照）、進路が音楽以外の人は、音楽の道を目指す人に比べ、「対人間関係」がより強い原動力になっていることがわかる。

どうしてピアノを続けるの？その原動力とは（進路：別）

◆進路：音楽



◆進路：音楽以外



また、数値には出ていないが、「対人間関係」からピアノの先生の影響だけをとって見た場合、音楽の道に進もうと思っている生徒は、そうでない人よりもピアノ指導者に影響を受けているケースが多かったのも印象的。しかし、音楽以外の進路を選んだ人の「先生やお母さんと昔はあーだったね」と思い出話ができることが楽しい」（中1・東京）「先生の熱血っぷりを見たりするので続けられます」（中1・愛知）「先生が楽しく長く続けていこうと言ってくれた」（中2・神奈川）「先生の人柄が尊敬できる」（中2・千葉）などの意見からも、継続において指導者の存在が重要な鍵となることがよくわかる。

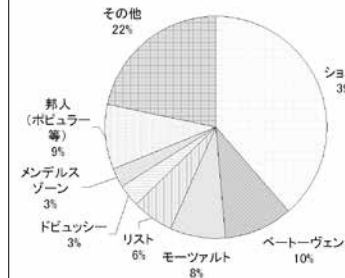
音楽が好きだから！

次に多く挙げられたのが、「対音楽」的原動力。音楽を進路に選んだ人の中では1位の理由となった。

昔は言われるがままレッスンに通い、ピアノを続けてきた子供達が、音楽の楽しさを一番感じ始めるのはこの時期ではないだろうか。「新曲と出会っていくのが本当に楽しみ」（高2・長野）、「『ピアノをやめる』ということが考えられない。弾きたい曲が弾けなくなってしまうから・・・」（中3・茨城）など、曲自体の魅力が継続に結びついている例は多い。中には、「好きな曲に出会ったら、すぐパソコンで曲名、作者を調べ、譜面をダウンロードしたり、コピーしたり、買ったりして自分で弾いてみる。」（高3・埼玉）という探究心旺盛な人も。

また、「妹とのデュオでとても素敵な曲を弾く事が出来るので、毎年楽しみにしています」（中1・青森）「ポピュラー・ステップに出て連弾でルパン3世をひいた時、とても楽しかった」（高3・神奈川）など、普段とは違う形での音楽体験もモチベーションアップに貢献している。

好きな作曲家



中高生が選ぶ好きな作曲家ランキング。「憧れの曲」では、ショパンの「幻想即興曲」や、モーツァルト「トルコ行進曲」など、スタンダードな名曲が、根強い人気を見せた。

達成感の階段を上る

継続することの難しさを一番感じやすいこの時期にこそ、苦勞して結果が出た時の喜びと達成感も大きい。「辛いことでもコツコツ続けていければ、成果が残るということを体験できた」（中2・大阪）「努力した分だけどんどん色々な曲が弾けるようになり、練習は努力した分だけ喜びに繋がるものだと思うようになった」（中1・岐阜）アンケートでも、「曲が完成した時のうれしい気持ち」（中1・栃木）「ステージ演奏がうまく行ったときの達成感」（中2・東京）などの記述が多く、短期的目標をひ

私がピアノを続ける理由

ステップでは、ステージ演奏といった明確な目的意識に加え、様々な目標やエピソードによって参加者がピアノ継続への思いを固めている。沢山寄せられたエピソードの中から一部をご紹介します。

◆見ず知らずの人と…

「高2の時、ステップの演奏を終えて客席へ戻ると、見ず知らずのおばさんが笑顔で近づいてきて、『感動しました。ほんとうにありがとう。』と言って手紙を渡してくれ、私の手を温かく握ってくれた。その時、これからは自分のためだけになく、人のために演奏できるような人間になりたいなと思った。」（高3・三重）

◆素敵な講評がもらえた！

「ステップでベートーヴェン・ソナタを弾いた時、『あなたはドイツものが弾ける人ですね』と講評をいただいたとき、うれしかった」（中2・茨城）「以前、コンクール課題曲レッスンをして頂いた先生にステップでお会いして覚えていて下さり、講評もどの位良くなったかを書いて下さったので大変嬉しかったです。」（中2・埼玉）

◆先生との絆が深まった！

「ステップでの演奏が終わったあと、先生がすぐに私のところにやって

来て『良かったよ!!』と手を差し出してくれたことが、今でも印象に残っています。その次の日も先生から、『昨日のスケルツォは本当に震えましたね!!』と書いたメールが入っていました。それからもう二年が経ちますが、私はそのときの感動を忘れられません。これからも『震え上がる』演奏をしたいと思います。」（中3・岡山）

◆色々な人にパワーをもらえた！

「中1の時、継続表彰記念コンサートに出演。特に95歳のおばあちゃんの演奏が今もずっと心に残っています。おばあちゃんを見て、音楽に年齢は関係ないということを知り、パワーをもらいました。このコンサートで日本中にこんなにたくさんピアノを愛している人がいることを知り、これからはもっとピアノを続けていきたいと思いました。」（中3・沖縄）

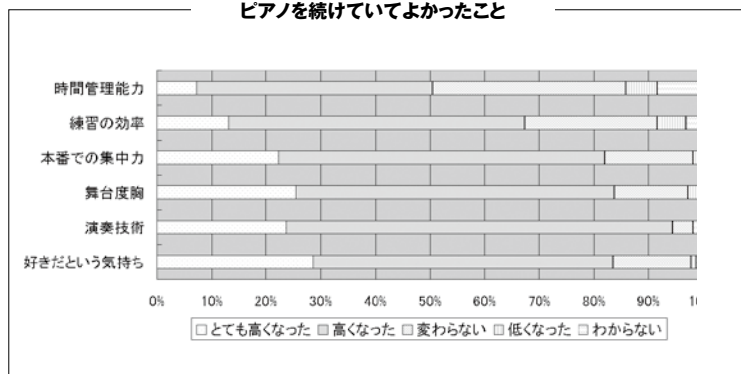
◆自作の曲を誉めてもらえた！

「フリーステップで、作詞作曲の曲を弾き語りで演じる『自作自演』をやらせてもらいました。『私が勝手に作った素人の曲、皆に理解してもらえないかな』と不安でしたが、演奏後、あたたかい拍手をもらい、審査員の方々にも『スゴイね』と言ってもらい、メッセージも嬉しくなる事ばかり書いてもらえて、おまけに一般の方々からもお手紙をもらいました。『もう、この後の人生、これ以上嬉しい事はないんじゃないか』と思うくらい嬉しかったです。」（中3・和歌山）

とつひとつこなしていくことが長期継続への足がかりになっていることが見て取れる。

また、成果を実感できるのは音楽面だけではない。下グラフに見られる「集中力」や「無頼度胸」の育成の他にも、「ピアノを継続していたことによって、同じ年に始めた水泳も続ける力がついたと思う」(中1・千葉)「指先の動きが速くなって、日常生活に利用できる」(中2・京都)「ピアノで礼儀が身についた」(中3・三重)などの体験談が寄せられた。こういったプラス点に気付くきっかけを、指導者が作ってあげることも継続へつながるひとつの道かもしれない。

ピアノを続けていてよかったこと



ピアノは「癒し系」！？・・・他

進路に音楽を選んでいない人にとっては特に、日常生活からの逃げ道やストレス解消としてのピアノの役割も見逃せない数値となって表れている。「毎日忙しくて息が詰まりそうになった時に息抜きで楽しく弾く」(高3・徳島)「勉強や人間関係でつまずいた時、ピアノが助けてくれる」(中3・長野)「疲れた時に自分の好きな曲を弾くといやされるから」(高1・三重)精神的なトラブルを抱えやすいこの時期、ピアノは「癒し」や「息抜き」の存在としても活躍している。

他にも、「毎日の習慣になっているので自然に続いている」(中1・愛知)、「ゲームが買ってもらえる」(中1・愛知)、「いろいろなドレスを着て演奏できる」(中1・福岡)、「母に対する対抗心が原動力」(中2・埼玉)などなど、「ピアノを続けたい!」と思う理由は実に様々だ。

こんな先生だから、ピアノ続けてます!

レッスンはまるで音楽の授業

加藤千絵さん(西尾学先生) 中2/愛知県

お休みすることが難しい部活動に所属しており、その大会も多く、なかなか定期的なレッスンに行くことができない時期があります。楽器店で教えてもらっているのでも、レッスン時間の変更は難しいですが、そんな中でも最大限融通をきかせてくださるので、今でも続いています。部活動の終わり時間がまちまちのため、そこから帰ってこないレッスンに行けない現状。私の先生は、まずは続けることを念頭において下



さり、当日の30分前ぐらいになってからでも構わないから連絡を下さい、と言ってくれる。そこで行くのか行かな

いのか決める生活が、今年の夏は1ヶ月以上続いてしまい、こんなものでは先生も私も嫌になってやめてしまおうかと思ったけど、会ったときには、気さくに声を掛けてくださるのが支えになって続けています。

また、ピアノの奏法だけにとらわれず、音楽の講義を聴いているような感じがするのがいいですね。モーツァルトの伝記をすすめられたり、どういう時代というだけでなく、作曲者がどういう気持ちのときに作られた曲なのか、ということもお話しくれます。この交響曲を聴いたほうがいいのか、このバイオリン協奏曲を聴くとわかるよ、オーケストラでいうとここが木管楽器、ここがウツティだよとか、この先生についていけば、勉強になる!と思う先生です。

先生も私のことを見捨てずに大目に見てくれているので、私もずっとこの先生について行こうと思っています。

こんな先生だから、ピアノ続けてます!

先生と一緒に白い布を染めていくような曲づくり

大田友羽佳さん(田代雅恵美先生) 中3/千葉県



私の先生は、一緒に曲を仕上げる楽しさを教えてくれる先生です。だから、表現することの面白さもわかるようになりました。新しい曲に出会うたびに、自分らしい弾き方が少しずつわかっていくのはとても嬉しいし、最初はまったく知らなかった曲を仕上げていくのは白い布を染めていくみたいでやりがいがあります。そんな感情を感じられるようになったことがピアノを続けてきてもっとも良かったことだと思います。

レッスンで印象に残っているのは、小学生のときに「熱帯魚」という曲を弾いたとき、まだ表現することが分かっていなかった私に、泳いでいる、夢の中にいるように、などなど情景をあらわす言葉で事細かにお話し下さったこと。それからいろいろな曲でイメージをもって

弾けるようになりましたし、ただ曲を与えられるだけでなく、その時代の背景などもひとつひとつちゃんと説明してくれます。

私が先生を尊敬する理由は、たくさんの生徒がいて見ているだけでも過密スケジュールなのに、個人個人に教え方をあわせているだけでなく、まったく体調を崩すことなく、いつもいつも元気に迎えてくれること。進路では、音楽以外を考えていますが、自分の好きなことを人に教えている姿が憧れで、私も先生のように、今後好きなことにめぐり合うかもしれないと思って日々模索しています。

ピアノは、悩んだりとかすることも多く、大変だと思うけれど、自分の気持ちに近い曲を弾くことで落ち込んだ気持ちをリセットしたり、気持ちの整理ができてよかったと思う瞬間がたくさんあります。なので、私は他の人にもピアノを続けて欲しいと思っています。

こんな先生だから、ピアノ続けてます!

左手だけでも、1pずつでも…両立への理解と支援

山野千夏さん(石嶺尚江先生) 中1/大阪府

私の先生は、あげたり下げたりが上手な先生で、比喻表現がすごく上手。きびしいことも笑わせる内容で言ってくれるので落ち込まずにさらに頑張ることが出来ます。バレーボールや塾との両立で練習が進まなくても、練習できなかった理由をちゃんとときいてくれる先生で、そうだね、忙しかったんだね、と、片手ずつ、1ページずつの宿題の出し方をしてくれます。また、何よりも、この曲のポイントはここだから、ということ曲を与える段階でアドバイスくださるので、目標を持った要領を得た練習ができることもうれしく思っています。

部活も、ただやめなさい、ではなく、つき指をするバレーボール部を選んだ私にも、人間として経験をつむことで音楽ものってくるからと、勧めてくれるし、右手のつき指をしたときは、左手だけでもレッスンにきなさい、顔だけみに来なさいと言って下さったり、好きな曲を気分よく弾かせてくれたりします。そして、レッスン

中に叱られたとしても、帰る前、帰り際、レッスンの最後に叱ることは絶対にありません。だから、先生の漫談のようなお話しが好きで、また次もレッスンに行きたくなります。

コンペ直前にはとても厳しく、丁寧に指導下さる反面、ステップでは、ジャズからアニメ、ポピュラーどれでも好きな曲を弾かせてくれる。また、発表会では、ほとんどがアンサンブルで、「オバンド」と名前をつけた生徒の母親が組んだアンサンブルもやっています。教室全体がまとまり、孤独にひとりだけ習っているという雰囲気はまったくなく、学校もばらばらなのに門下が皆仲が良いのも私の先生の良いところだと思っています。



アンケート調査で見る、「継続」と「両立」の実態&対策

どうすればピアノを続けられるの？

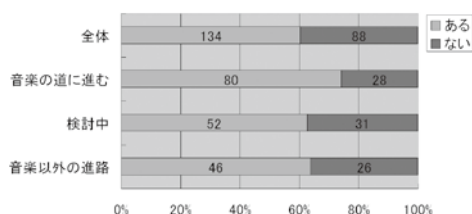
5つのキーワードで説く、 「両立」の極意

何事も、始めるのは簡単でも長く続けていくことは難しい。しかし、どんなに忙しくともピアノ学習を学業や課外活動と平行して継続している子達は沢山いる。この「両立」に関する更なる実態を探るため、本特集では中高生指導に深く携わってきた指導者約60名*にアンケート調査と取材を行なった。(有効回答数34件)

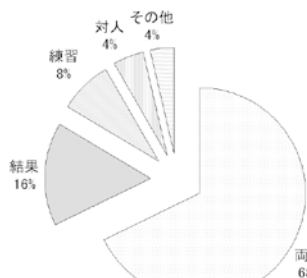
*アンケート対象者は、過去2年間で中1～高3の生徒を3人以上、ピティナのステージに10回以上参加させた指導者の方々。

中高生アンケート

Q ピアノを続けることが難しいと思ったことがありますか？



Q その原因は？

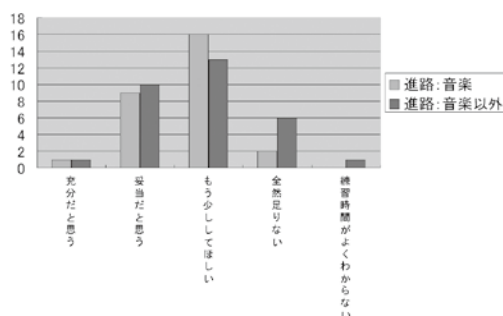


ピアノを続けることが難しいと思った中高生のうち、実に7割近くが勉強や部活との両立を理由に挙げている。また、指導者側も両立の問題と課題を強く意識していることが、右のアンケート結果によく表れている。

生徒がピアノのために割ける時間がどんどん少なくなってくる中、指導者はどのような手助けやサポートをしてあげられるのか。特に音楽以外の道を目指す学生にとっては、「両立」は切実な問題だ。中高生指導の現場から届いた指導者の本音とノウハウをご紹介します。5つのキーワードに沿って「両立」の実現を考える。

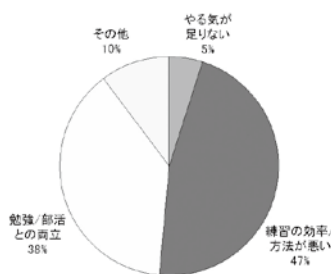
指導者アンケート

Q 中高生の生徒さんの練習時間について、大体的な考えをお聞かせください。

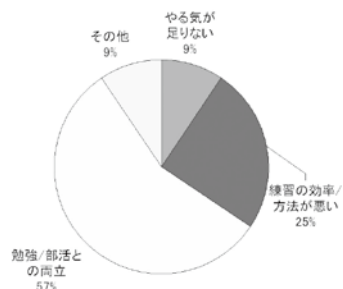


Q 練習が不十分だとしたら、その原因は何だと思いますか。

◆音楽の道に進む(と思われる)生徒について



◆音楽以外の道に進む(と思われる)生徒について



1 フレキシブルな レッスン体制

小学生の頃に比べ、ぐっと忙しくなる中学・高校生活。しかし今回の指導者アンケート結果では、進路を音楽に決めている生徒のみならず、音楽以外の道を目指す中高生のレッスン回数も小学生とほぼ変わらないという意見がほとんどだった。

一方で、レッスンの組み方には大きく変化が見られる。生徒が学校生活を優先出来るように、定期テスト前後はお休みにする、学校行事に重ならないように組む、毎回のレッスン時間を毎週生徒と相談しあって決めるなど、レッスン時間確保の対策が必要となってくるからだ。中には、「月何回と確定しないで、年間回数でレッスンを行なっています」（二本柳奈津子先生）「可能な生徒に限り、学校の年間表示予定表を提出してもらっています」

（俣野昌子先生）といった例も。指導者の方で、生徒の予定にある程度歩み寄ることが「両立」の必須条件になるようだ。

他に、このような工夫も。

♪「新しい曲に取り掛かったら、出来るだけ短期間に仕上げるようにレッスン日程を組みます。時には、月の前半に3回入れたりすることも。」（福井亜貴子先生）

♪「月に4回の場合は、40分レッスンか50分レッスン、月2回や1回の場合は、50分レッスン。その他、1レッスン50分のワンレッスン制と選択制にしています。」（土持恵理美先生）

「チケット制」の導入で、 レッスン内容も自由に!

頼みゆき先生



ハードスケジュールの中で、ピアノも勉強も部活もマイペースで持続できる手段として、レッスンはチケット制にしています。

私の中高生の生徒は趣味で続けている子ばかりですので、小さい子に比べレッスンに時間を割くことが難しくなっていました。毎週や月何回と指定してしまわずに、自分で計画を持ってレッスン日を

設定できるように、と取り入れたのがこの制度です。

レッスン回数は少なくなりましたが、体系が自由になったことで生徒が自分のこととしてピアノと向き合えるようになったと思います。皆クラシックのみならず、ポップスやジャズなどあらゆるジャンルの曲を思い思いに提示してきて、レッスン内容もその時々によってアンサンブルだったり伴奏だったりと色々です。生徒が自分で調べてきて、「このコンクールに出たい!」と言い出すことも。各々違うライフスタイルから自分なりのビジョンを見出すことで、それまでに得た実績も活かされ、更に大きな心の成長へと結びついていけば、と考えています。

今回指導者アンケートにご協力いただいたのは、以下34名の先生方。（五十音順）
貴重なご意見・お話、ありがとうございました!

飯田文代先生（青森）、石黒加須美先生（愛知）、石原美登里先生（新潟）、岩佐生恵先生（愛媛）、岩崎純子先生（宮崎）、奥村真先生（愛知）、川合見幸先生（愛知）、川岡優子先生（広島）、川崎のりこ先生（神奈川）、川名雅美先生（栃木）、北島依子先生（大阪）、久保山千可子先生（福岡）、今野早苗先生（神奈川）、佐野幸枝先生（神奈川）、重野美樹先生（広島）、高嶋麻企先生（神奈川）、武田裕美先生（鹿児島）、太月浩美先生（鹿児島）、土持恵理美先生（千葉）、徳永憲子先生（福井）、頼みゆき先生（山口）、長沢あけみ先生（東京）、永山恵子先生（愛知）、西尾学先生（愛知）、西野真琴先生（鳥取）、二本柳奈津子先生（大阪）、林浩子先生（愛知）、福井亜貴子先生（奈良）、福本幸子先生（福岡）、俣野昌子先生（福岡）、真宮恵美先生（神奈川）、山田つづみ先生（三重）、吉岡明代先生（徳島）、吉田真理子先生（滋賀）

2 魅力的な選曲

楽曲や音楽自体に魅力を感じてピアノを続ける生徒が多くなっていくにつれ(17ページ参照)、彼等が「弾きたい!」と思えるような曲選びは重要である。そのためには、指導者がCDや楽譜、映像などを貸し出したり、コンサートへ出かけることを勧めて曲選びの参考にさせたりすることで、選曲の際に生徒側の意思を汲む必要が出てくる。また、生徒とよく話し合って色々な曲の知識と興味を持たせたり(北島依子先生)、曲を与える時も、その背景や特徴、そして今その曲を弾くことのメリットなどを話し合ってから渡したり(林浩子先生)と、指導者側の知識と、生徒一人一人の状態やニーズをに対応できる力量が大切だ。また、ほとんどのアンケート回答者がアンサンブルをレッスンに取り入れる一方で、ポップスの

導入には若干消極的だという点も興味深い。中高生世代が最も興味を持つこの分野の勉強は、今後のピアノ指導者にとってひとつの課題かもしれない。

選曲に迷った時の、お役立ちサイトはこちら



ピアノ曲辞典
www.piano.or.jp/enc/

NAXOS (ナクソス)
www.naxos.co.jp/



ポップスで長期的なレパートリー作りを

沢田菊江先生



将来いつでも取り出すことが出来て、永遠に弾き続けられるようなレパートリー作りを常に意識しているので、ポピュラー曲も、基本的にはずっと弾けるような、ディズニー名曲や

ビートルズなどを選んでいきます。その時非常に役立っているのは、ステップ課題曲一覧表のポップス曲のリスト。次に弾きたい曲をこの欄からいつも張り切って選んできて、ステップで弾くのを楽しみにしている生徒もいます。ただ、不思議なもので、ポピュラーをやっていると、クラシックに戻りたくなるようで、ずっとポピュラーばかり弾いていた子が、ある日突然「ソナタを弾く!」と言い出したことも(笑)。

「新曲コンサート」で、たくさんの曲を知ろう!

重野美樹先生



週1回のグループレッスンの時に、「新曲コンサート」を毎回開いています。中高生の生徒7、8人が集まるその場で、生徒達が自分で捜してきた曲を発表させます。パステインやマクダウェル、ギロックや邦人作曲家など、うちにある種々

の曲集の中から自分でかたっぱしから初見をしてみても自由で選曲し、一週間で自力で曲を組み立てて披露しています。

目的は、とにかく楽譜をたくさん読んでみることに、短い簡単な曲で分析をして、音のイメージを作り、表現する勉強をして欲しいこと。生徒達の嗜好や、初見力・表現力もよくわかり、とても楽しいです。選曲をして演奏をすることで精一杯な中学生は、単純な曲に命を吹き込み、表現力豊かな高校生の演奏から多大な刺激を受けているようです。

3 練習の時間確保と効率化

前述の指導者アンケート結果でも明らかになった通り、大半の指導者は生徒の練習時間が不十分だと感じている。更にその原因としては、音楽の道を目指す生徒は、「練習の効率/方法が悪い」という意見が一番多く、それ以外の進路を目指す生徒についてもこの理由は2番目に多く挙げられている。(P20 アンケート結果参照)

では、きちんと練習の時間を取り、内容を効率化させるためにはどうすればよいのか。

練習時間を上手く確保

レッスンで全ての練習が終了出来るように工夫する、家での練習を強要しない派もいれば、「一日の一番楽しみな時間を作り、そのために残りの時間をどう組み立てると充実した成果を出せるかをよく話し合っ、一人一人の毎日をサポートしようとメールでやり取りしている」(永山恵子先生)という先生も。まずは、「こまめに家での時間の使い方を尋ねる」(川崎のりこ先生)ことから始めてみても良いかもしれない。

効率と充実を目指す

更に、練習の方法・内容に関しては次のような工夫が挙げられた。

♪「弾く時には頭の中に迷いがないように、なるべく楽譜を先に見て、理解できない部分はなくして取り組ま

せる。」(福本幸子先生)

♪「レッスンに来た時に、現在の状態のどこに問題があるかを理解させて、その解釈の方法を具体的に示し、そこで実践させて帰すように心がけている。」(佐野幸枝先生)

♪「夏・冬休みなど、時間のあるときにいつもよりレッスン時間を長くして、譜読みを一緒にやったり、練習を見てあげたりします。」(飯田文代先生)

♪「テスト期間、大会中などは月に1〜2回のレッスンでも、グループレッスンで楽典・ソルフェージュは行なって、ピアノを聞く感覚をなくさないようにしています。」(太月浩美先生)

「ただ弾くだけ」ではない練習方法の再認識が求められている。

中高生アンケート

進路別の平均練習時間
※有効回答対象211名

全体	練習時間平均
平日平均時間	72分(最低10分、最高240分)
休日平均時間	103分(最低0分、最高660分)
進路:音楽	練習時間平均
平日平均時間	106分
休日平均時間	173分
進路:検討中	練習時間平均
平日平均時間	68分
休日平均時間	106分
音楽以外	練習時間平均
平日平均時間	43分
休日平均時間	59分

『隙間練習』で、生徒の状態をチェック

俣野 昌子先生



中学生になったばかりで、時間面でも生活面でも、一日のサイクルの変化に対処出来ず悩んでいた生徒がいたので、二人で日課表作りを行ないました。その結果、ピアノを一番無理なく続けていくために、まとまった長い練習ではなく、「隙間練習」を行なうことを約束しました。

朝学校へ行く前の10分間にハノンとスケールの練習をする、帰宅後の犬の散歩と食事の間にエチュードの右手だけを練習する…などを決め、レッスン時にその週出来た練習をかき集め、組み立てます。すると、本人が負担を感じることなくコンスタントに練習時間をとることができ、こちらで練習状況を把握して、足りないところを重点的に補えるようになりました。また、練習で何が出来たかとその理由を報告してもらうことで、今まで漠然としていた生徒の生活状態や練習の様子などがはっきりわかるようになったことも、とてもよかったと思います。

4 具体的な目標設定

「両立」のために必要なのは、時間だけではない。彼らがピアノを習いつづけていくためには、モチベーションを持続させてあげることが重要になってくる。「なんとなく」ピアノを続けている子は少なくない。充実したピアノ学習・体験に向けて、短期的・長期的目線での目標作りと、目的意識をしっかりと持たせてあげることがひとつの鍵だと言える。

練習時間の表を作って、成果を明確に

二本柳 奈津子先生



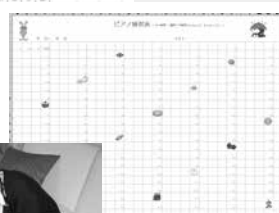
全ての生徒に手作りの表を持たせて、家での練習時間のマス目(15分単位)に色を塗ってきてもらい、毎週の練習傾向の移り変わりが一目でわかるようにしています。そして、7時間練習すること、教室に置いてある各自の100マス表に色を塗っていきます。

この100マス表は、もともとは教室で合格曲数の記録として使っていました。しかし、この手法ですと小さい子はどんどん進んでいけても、大きくなって曲が難しくなるにつれ、なかなか色が塗れなくなっていくので、練習時間と合格曲数を合わせて評価する形に

しました。100マスに達するとプレゼントをあげて表彰していますので、生徒達も大きな励みになっているようです。



◀▼ 時間割(上)と100マス表(下)



◀ 100マス表に色塗り。冬休みの分をこっそり塗れて笑顔です。

本番後には3つの目標の話し合いをする

奥村 真先生



生徒には、3つの目標を明確にして、レッスンの節目節目で確認しています。

①長期的目標：ピアニストの手を作っていく、など

②中期的目標：脱力や、指の付け根の筋肉の増強など

③短期的目標：音間違いや指使いを直すなど

手を作っていくことや読譜など、その目標が上記のどのタイプに該当するかは生徒によって違ってきま

すが、達成までの期間は予測より短めに設定するようにしています。以前、読譜は楽譜一冊単位でやるものだ、と試しに言ってみたところ、次のレッスンの時にその生徒が「半分しか出来ませんでした」と言ってきたこともあって驚きました(笑)。

また、発表会やステップなどの本番の後は、必ずよかったことと悪かったことを3つずつ話し合い、今までの目標達成状況とこれからの課題を明確にするようにしています。すぐにクリア出来るはずの短期的目標が達成出来ていないときは厳しく言いますが、簡単に出来ないことに対しては決して厳しくはしません。生徒の状態を常に把握してそれに応じた目標設定とフォローをしてあげることが大切だと思います。

5 新しいタイプの刺激を

ピアノを継続してきたからこそ経験できる発見、繋がりが、出会いなどによって得るものは大きい。中高生指導で成功を収めている指導者は、そのような場や機会提供を、多種多様な形で実現させている。

演奏機会の提供

コンクールやステップへの参加を呼びかけるだけでなく、発表会やコンサートなど、生徒のための演奏機会を積極的に作り出している指導者は少なくない。定期的に目標を持つことが生徒の刺激になるということ以外にも、「コンサートに家族で参加してもらうことで、保護者の協力も得ています」(徳永憲子先生)「同門の先輩達の頑張っている姿を見て、後輩も保護者も励みとなっている」(川名雅美先生)といった効果も挙げられている。

音楽に触れるきっかけを

良い演奏会に誘う、CDやDVDを貸し出す、他楽器とのアンサンブルに参加させる…生徒をレッスン外で良い音楽に触れさせることは、ピアノへの興味持続にもつながる。「すぐれた演奏家を呼んでコンサートを主催

しています」(石原美登里先生)というアクティブな指導者も。また、「和太鼓やサンバなど、ピアノ以外の音楽による発表会」(石黒加須美先生)などのユニークな企画も興味深い。

仲間づくりへの協力

中学生になった頃から、同世代の友人は生活の中で大きな存在感と影響を持ち始める。中高生アンケートでも、仲間の存在を継続への支えにしているという意見は多い。

グループレッスンや練習会、生徒同士でのアンサンブル機会は、そういった仲間づくりへの大きな手助けとなる。生徒同士の交流が少ない場合、「同学年の子と会わせるようなレッスンの時間設定をしてみる」(吉岡明代先生)小さなきっかけ作りや、「コンペのデュオ部門に、ピアノを趣味で続けている子を専門を目指す生徒と組ませたりしています」(真宮恵美先生)という形でのアンサンブルの導入も、交流を深めさせる良い手ではないだろうか。後者は、音楽専門の道を目指さない生徒へ刺激と目標を与えるといった点でも効果的な例ではないだろうか。

クラス中でオペラを制作

久保山 千可子先生



今はクラス中でオペラ「魔笛」に取り組んでいます。来年夏の公演に向けて、週に1回、歌と踊りの練習に励んでいます。ステップのフリーステージにも出る予定です。

私自身、大学卒業後に色々なオペラを見て勉強するように心がけてきましたが、やはり小さい頃からこういった文化に触れていないと、脳や体ですぐに吸収できないという現実を感じていました。そこで、自分でピアノの教室を持つようになった時、歌や踊りなど、小さい子のための短い演目を少しずつ取り入れてきました。

最近はその生徒たちも中学生になり、ミュージカルやオペラに取り組むようになっています。20～30人で力を合わせてステージを作り上げていくことで強い仲間意識

が生まれ、深い付き合いが生まれています。お互いの存在も非常に良い刺激となっているようで、誰に言われたからというわけではなく、音楽大学に進みたいという子も増えてきました。そして一番よかったと思うのは、モーツァルトのピアノ曲やカルテット、コンチェルトなどを弾く時に、レッスンで「ここはパパゲーノが歌っているみたいだね!」などと言うと「ほんとだ!」とすぐに感覚でわかってくれるということ。先生と生徒2人の共通話題がある楽しさ、又教室のみんなの共通話題があることの素晴らしいさを感じています。この年齢から、ピアノ曲以外についての雑学を頭と体にインプットしていく機会を作ってあげたいと思っています。



▲去年の夏公演にて

変化は『残念』じゃない、 『当然』なんです

ピティナ・ピアノコンペティションG級・特級部門はもちろん、近年では浜松国際コンクールやチャイコフスキー国際コンクールなどでも素晴らしい活躍を見せる、日本でトップの実力を誇るピアニスト達。そんな彼らは、皆口を揃えて恩師・江口文子先生への尊敬の念と信頼を口にする。生徒との理想的な信頼関係を築きあげる秘密を探るべく、江口先生の指導者としての素顔に迫る。



江口文子先生
当協会理事

音楽と誠実に向き合うための コンクール

——まずは、前山仁美さんの特級グランプリ受賞、おめでとうございます！

「ありがとうございます！前山さんは小学生の頃からレッスンにいらしていますが、音楽への情熱はもちろん、自立の精神も持っている人です。彼女の音が認めていただけたことは本当に嬉しかったです。今後彼女のような、ステージでパーソナリティーを表現できるピアニストの方がもっと増えてほしいと思います。

前山さんは、G級と特級を今まで受けているのですが、G級のプログラムを見たとき、おどろきました。というのも、G特級のフリープログラムは、自分の才能を自由に発揮出来るという見方もあるのですが、自分がそれまでに音楽の色々なジャンルと誠実に付き合ってきたかを知る機会でもあるからです。『これなら目立つ』という曲を、とりあえず弾けるからという理由で選んでしまうのではなく、一度これまで付き合ってきた音楽と真剣に向き

合った曲でプログラムを構成していました。そして、周囲に認めていただけた…その経験が、彼女の今後のためにもすごくよかったと感じています。

自分を高める為に、見つめる為にコンクールのステージがあって、それを誰かが真剣に聴いてくれる。これは、中学生高校生の頃に自分というものが目覚めてきて、向き合わなければいけなくなる時期には特に、とても大切なことだと思います。」

何もしないで見守ってあげる 時期も必要

——そういった大事な時期をどう過ごすかが、後々の音楽人生にかなり影響を与えそうですね。

「小さい時に『あなたは天才！』『将来がたのしみ！』などと色々なところで誉められ、親や先生の期待と評価を一身に受けて育ってきた子が、成長と共に自分の耳も肥えて、自分の演奏に満足出来ない。といって、どうし



▲昨年第2回福田靖子賞を受賞し、今年3月の「ピアノコンチェルトの夕べ」にも出演予定の須藤梨菜さん。「江口先生がホールにいてくれるだけで安心して弾ける」という須藤さんに対し、「本当に明るくて音楽が純粋に好きな人で、周りからいつも愛される存在。彼女と付き合うことが出来たのは、本当によかったと思います」と江口先生は語る。このような強い信頼関係も、江口先生の温かい指導方針あってならでは。

たよいか分からない。当然、結果もよくない。そして、コンクールの曲も段々と大きくなり、体の発育とともになんとなく体がだるかったり、学校の勉強も難しくなったりして、色々なことが初めての経験という中、周りに『あなたの小さい頃はよかったのよ』と言われてしまうと、過去の自分が羨ましいと思ってしまうんですね。初心に戻って、などといわれても、すでに自分には当時のドレスもリボンも似合わない。そういう時期が、本人にとっても周りにとっても問題だと思います。

そもそも成長の過程は誰も通るもので、大作曲家の作品を弾くということは、彼らが曲を書

きながら持っていた悩みと付き合うということですから、小さい頃のように弾いて欲しいということは非常に矛盾しているのです。それでも、昔は表彰されてお祝いしてもらっていると、そうならなかった時に『残念ですね』という言葉をもらうことになります。それで、『残念』という言葉がずっと頭についてまわるのです。

でもそれは、『残念』ではなく『当然』だ、という形で周囲が受け入れないといけないと思います。お花も、毎日毎日お水を上げて、どこにでも持って歩いていたら枯れてしまいます。同様に、彼等が行き詰まったなと思ってもしばらく見ないふりをして、いつの間にか新しい芽が出るのを待つ期間が必要だと思います。迷っても良い時期、何もしない大事な時期が、あると思うのです。いつの間にか新しい芽がのびて、みずみずしい力を彼らから感じた時ほど、うれしい事はありませ

ん。」



▲第30回ピティナ・ピアノコンペティション特級グランプリを受賞した前山仁美さんと、表彰式にて。「先生はどんな小さな曲でも隣で美しく弾いて下さったので、ああいう風に弾ければいいな、と子供の頃から憧れてました」(前山さん談)

「ないない」づくしの弊害

——批判的な言葉によって、本来の才能も発揮できなくなりそうですよね。

「そうですね。『この程度ではコンクールに出られない』とか、『間に合わない』『練習が足りない』など、『ないない』を言われ続けてしまいます。けれども、その『ない』時に、彼等は自分なりに何かを持とうとして、探していると思います。

今の時代、働かない若者なども問題になっていますが、本当は誰だって人の役に立って『ありがとう』って言ってもらいたい。自分は社会にとって大切に、必要な存在だということを、一回味わうと嬉しいものです。そして、こういった問題は、今突然起こったのではなく、前から起こっていたもの。ですから、その子自身はもちろん、その子に数年前に何をしたかを、大人社会が反省すべきではないでしょうか。」

E p i l o g u e

あとがき

「忙しい」「他に興味が移った」「つまらなくなった」「なかなか上達できなくなった」…昨今の中高生がピアノを辞めてしまう理由は様々だ。しかし、ピアノを楽しく続けている生徒を持つ指導者に共通しているものがあるとすれば、それは生徒一人一人と真剣に向き合い、信頼関係を築くことが出来ているということ。また、特に今回の「継続」や「両立」についての調査から見てきたように、生徒がどんなに忙しくても、他のことに興味があっても、指導者の工夫と努力とリード次第ではピアノを継続していくことは可能だ。学ぶ意欲や学力・気力・体力が下がり、様々な実体験も少なくなることで社会性やコミュニケーション能力等が不足している現代の学生達。ピアノ継続から得られる多種多様な経験や自己成長、そしてピアノ指導者との実り多い関係が、これらの問題の解決策となり得る可能性は充分にあるのではないだろうか。(取材・構成◎本田絵里子/渡邊千恵)